DAM

DOCD-0004

COMPACT disc DIGITAL AUDIO

Classic & Jazz

MY HEARTY SOUNDS

Classic & Jazz MY

T.NO

1 ホーム・スウィート・ホーム(埴生の宿) …… イングランド民謡 (3'29")
歌：ザ・スコラーズ
録音　1981．5．24～25　メディア・スタジオ

2 峠のわが家 …… アメリカ民謡 (3'29")
指揮：ロジェー・ワーグナー/ロジェー・ワーグナー合唱団
録音　1982．3．24　シカゴ

3 アランフェス協奏曲 第2楽章より …… ロドリーゴ (5'14")
ギター：荘村清志
録音　1985．8．東芝EMI 3st.

4 白鳥 …… サン=サーンス (2'42")
チェロ：岩崎 洸/ピアノ：岩崎 淑
録音　1981．1．14　茅ケ崎文化会館

5 ディヴェルティメント 第1番 二長調 K.136 第1楽章 アレグロ …… モーツァルト (3'59")
ベルリン・フィルハーモニー八重奏団メンバー
録音　1979．7．御殿場市民会館

6 金の粉 …… エリック・サティ (5'35")
ピアノ：高橋アキ
録音　1983．9．23～24　東芝EMI 3st.

7 フーガ ト短調 BWV.578「小フーガ」…… J.S.バッハ (4'05")
パイプオルガン：ウェルナー・ヤコブ
録音　1985．3．20　武蔵野文化会館

8 ツィゴイネルワイゼン …… サラサーテ (8'26")
バイオリン：イヴリー・ギュトリス/ピアノ：練木繁夫
録音　1985．5．8～11　荒川公会堂

9 ワルキューレの騎行 …… ワーグナー (5'09")
指揮：ホルスト・シュタイン/NHK交響楽団
録音　1983．2．27～28　五反田簡易保険

HEARTY SOUNDS

T.NO

10 ジェット機の離陸
羽田空港 (1′39″)

※収録曲は全てデジタル・レコーディングです。

11 バット・ノット・フォー・ミー …… I.Gershwin-G.Gershwin (2′55″)
ヴォーカル：ナンシー・ウィルソン/ザ・グレート・ジャズ・トリオ
録音 1982．9．14～15 ニューヨーク © New World Music Corp.

12 ホワッツ・ニュー …… T.Burke-B.Haggart (4′06″)
ヴォーカル：ナンシー・ウィルソン/ザ・グレート・ジャズ・トリオ
© Warner Bros. Inc.

13 いつか王子様が …… Frank Charchill-Larry Morey (3′47″)
ヴォーカル：アーネスティン・アンダーソン 演奏/ピアノ：ノーマン・シモンズ/ベース：ジョージ・ムラーツ/ドラムス：ティム・ホーナー
© Bourne Co.

14 ラヴ・ウォークト・イン …… G.Gershwin-I.Gershwin (2′24″)
ヴォーカル：キャロル・スローン 演奏/ピアノ：ノーマン・シモンズ/ベース：ジョージ・ムラーツ/ドラムス：ティム・ホーナー
録音 1983．4．25/27 東芝EMI 3st. © Gershwin Publ. Corp.

15 ソリチュード …… D.Ellington-E.De Lange-Irving Mills (2′36″)
ヴォーカル：クリス・コナー 演奏/ピアノ：ノーマン・シモンズ/ベース：ジョージ・ムラーツ/ドラムス：ティム・ホーナー
録音 1983．4．25/27 東芝EMI 3st. © American Academy of Music.

16 ドリーム・カム・トゥルー …… 本多俊之 (5′36″)
サックス：本多俊之/ピアノ：チック・コリア/ベース：ミロスラフ・ビトウス/ドラムス：ロイ・ヘインズ
録音 1983．8．9～10 東芝EMI 3st. © Taiyo Music Publishing Co.

17 ラプソディ・デュ・ラ・リュシィ …… 本多俊之 (5′06″)
サックス、ピアノ＆パーカッション他：本多俊之/ドラムス：青山 純
録音 1985．3～4 東芝EMI 3st.

制作にあたって

永く暑かった夏も終りを告げ、芸術の秋をむかえました。
日頃は、第一家電をご愛顧いただきまして誠にありがとうございます。

'83年秋に、DAMオリジナル・デジタル録音を集めた第1号のCDを発表いたしましてから、今回で第4号となりました。この第4号CD「Classic & Jazz／MY HEARTY SOUNDS」は、当社のAVソフト専門店〝AVソフトピア〟の開店を記念して、特に、東芝EMIの未発売も含めた国内デジタル録音と2曲のDAMオリジナル録音で構成いたしました。「ホーム・スウィート・ホーム」「峠のわが家」「白鳥」「ツィゴイネルワイゼン」「ワルキューレの騎行」など、皆様になじみの深い曲を中心に17曲…。良い音、良い演奏を楽しみながら多彩な楽器で、システム・チェックをしていただき、秋の夜長を、恋人同士、お友達同士、またご家族皆様で、お楽しみいただければ幸いです。

今まさに、ＡＶ時代と言われております。オーディオ＆ビジュアルに真正面から取り組み、皆様のＡＶライフを、より豊かに、よりお楽しみいただくために、10月19日に秋葉原東口に、CD、LD、VHDのソフト専門店〝AVソフトピア〟をオープン致しました。お気軽に試視聴出来るアットホームな店をめざして行きますので、よろしくお願い致します。

当社は創業以来、オーディオには特に力を入れた活動を行ってまいりました。早くから会員制度を作り、〝オーディオ・ライフをお楽しみいただけるには、何をすべきか？〟をいつも考えて、各種コンサート、生録音会、カートリッジ組立教室、業界に先がけてのＡＶ生録音、ＰＣＭ生録音、ＳＬ生録の旅、野鳥収録会、東芝EMIスタジオ生録音など200回を越すイベント実施、また、名曲を楽しみながらシステム・チェックが出来る40タイトルを越すオーディオ・チェック・レコード〝DAM 45〟の制作（ダイレクトカッティング、マスタープレス、厚手プレス盤、フラットディスク、逆進行レコード、世界最重量最高厚220g/2.4mmなど、東芝EMI㈱のご協力をいただき、最新のトップ技術レベルにチャレンジ）etc.…。このように盛り沢山の企画を実施出来たのは、皆様に支えられてのことと感謝にたえません。

今後、DAMと致しましては、デジタル、アナログを問わず、音楽とは何かを考え、より良い音楽ソフトを開発し、皆様に少しでもお役に立てればと、一層努力をする所存でございます。

なお、第4号ＣＤの制作にあたりまして、東芝EMI㈱をはじめ関係各位に多大なご協力をいただきましたことを心からお礼申し上げます。

DAM推進委員会

なぜデジタル録音か？　何がゆえにCDか？

デジタル録音が世界的に定着してから6～7年を経過した。従来のテープ・レコーダーのアナログ方式と根本的なちがいをもった録音方式がどうちがうかなどということは改めて説明するまでもなく、オーディオに関心をもつひとならば御承知のはずである。

さらに1982年にコンパクト・ディスク(CD)の出現で、われわれは直接デジタル録音とふかいかかわりをいやでももたざるを得なくなった。エジソンとベルリナーの発明以来1世紀という長い歴史のあいだ、レコードそのものは音の振動波形をそのまま音溝のかたちに刻みこみ、サウンド・ボックスからラッパを、あるいはピック・アップ・カートリッジから、アンプリファイアーをへてスピーカーを鳴らすという、すべてがアナログ音響再生系のうえでなり立っており、その技術は高度に磨きあげられて今日に至っている。その発展はきわめて高度なものになるにしたがって限界も感じないわけにはゆかなくなった。録音系以上に問題は再生系、とくにプレイヤー系に見られる。今日、数100万円のプレイヤーというのもめずらしくはなくなったし、事実、そのような最高級プレイヤーを設置から調整まで細心の注意を集中して行えば、レコードの音はこんなにも素晴しいのかということを改めて認識させる。しかし、プレイヤーがよくなればなるほど、レコードそれ自体に問題があることもはっきりする。偏心、ソリ、ゴミ、キズなどに起因する、ノイズや変調歪からのがれることは不可能であり、場合によっては正当な音楽鑑賞を阻害する原因にさえなる。これをのがれるためにDAMのスーパー・アナログ・ディスクのように、高品質プレス素材の厚手重量盤などがつくられて、マニアの注目をひいているわけである。そのようなディスクにおいてもアナログ・ディスク録音の限界から逃れることはできない。ピアノの一ばん下のCは周波数では32.7Hz（88鍵ピアノの一ばん左端のAは27.5Hz）だが、このような低い音を正常にカッティングするにはフォルテでは振幅が大きくなり、きわめてむずかしい。コントラバスの一ばん低い音はEの開放弦つまりホ音（41.2Hz）あたりが正常な記録の限界というのが技術的な常識だが、それをこえるディスク録音は存在するけれど製盤も再生もすこぶるむずかしい。もっと問題になるのは、電気系、機械系に原因する変調歪が楽音を濁らせることで、これだけは致しかたない。

デジタル録音はそのようなアナログ録音再生の壁を打破するための必然的な技術的要求であった。デジタル録音はまだ実用化されてから10年ほどである。1世紀の技術的蓄積により高度な水準に達したアナログ録音テクニックとまったく異る技術的アプローチから出発したこの新しい録音・再生系は未知の領域がある。一部のひとが、アナログ録音の完成度に及ばないとする見解をもっているような問題が存在していることは否定できない。しかし、CDによって直接デジタル記録された音をきいた人はSNのよさと変調歪から生ずる汚れ

のない楽音の解像力の優位だけは否定することはできまい。ＣＤのこの基本的な性能のよさは、数万円のＣＤプレイヤーでもはっきり認識できることで、この点は、数10万円のアナログ・プレイヤー・システムでもなし得ない業である。技術の進歩のおそろしさを痛感せざるを得ない。

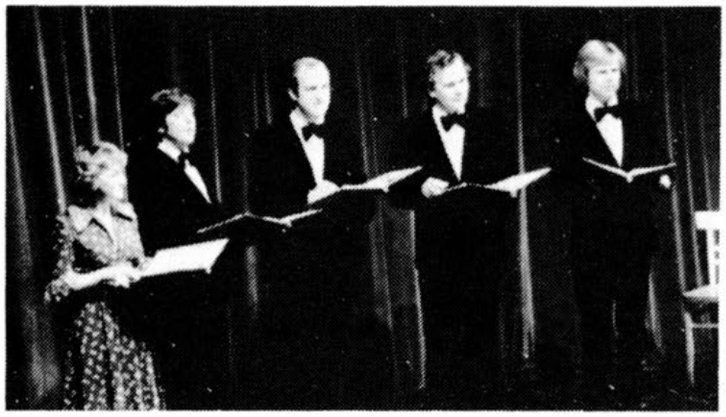
ＣＤという新しいメディアを得ることによって、われわれは自分のオーディオ・システムをたかめるための努力をアンプとスピーカーとリスニング環境（リスニング・ルームのアコースティックなど）の調整に集中できるようになったのである。

このＣＤには、デジタル録音マスターにより、今日多くのひとがきいている音楽のほとんどのジャンルが網羅されている。いい音の条件ですべての音楽をたのしむためにプログラムも凝って変化に富んでいる。もし、あなたが、その気になれば、自分のすきな音楽を最良の状態にチューニングするための絶好のソースともなる。そういうセットアップを行ったとき、ほかのジャンルの音楽のバランスがどうなるかということをチェックすることもできるし、どんな曲でも平均点以上の再生をするような調整にするか、という考えをもつひともいるだろう。そういう各人各様の音楽に対応するオーディオ・ソフトウェアというものはやりはじめれば、実におもしろいものであり、たのしみでもある。そうしたアプローチができるということも、ソース（音源）がすぐれていなければやり甲斐がないし、そういう意欲も生じさせる素材としてのＣＤがここにある。

1－9の音楽のききどころのポイント

デジタル録音になって、音のよさがとくに発揮されるようになったのは、声楽とピアノ、打楽器など過渡(トランジェント)成分の多い楽音である。

1のスコラーズの**「ホーム・スウィート・ホーム」**と2のロジェー・ワーグナー合唱団の**「峠のわが家」**はどちらもヴォーカルだが、編成とアレンジがまるでちがっている。イギリスのヴォーカル・アンサンブルのザ・スコラーズは男声クァルテットに女声ソプラノの５人編成だが、1ではソプラノのソロ・ヴォーカルでうたわれ、男声がハミングのハーモニーでオブリガートをつける。バックグラウンド・ノイズをほとんど感じさせないステュディオ録音なので、アカペラ（無伴奏）の声の純度、ことに、バックの男声のデリケートな弱音のハーモニーが、ソプラノ・パートを実に巧



ザ・スコラーズ

みにひきだしているのが印象的である。日本でふるくからおなじみのロジェー・ワーグナー合唱団の方は、ピアノ伴奏による、男声コーラスでうた

われている。西部開拓時代のフロンティア・ソングでルーズヴェルト大統領の一ばんお好みの歌であり、日本にも1930年代から数多くのレコードで親しまれているこの歌を、ワーグナー合唱団は何度か録音しているが、1982年シカゴでの最新録音は、あまり大きくない編成でストレートなアレンジによる原曲の味わいを出している。このコーラスのメンバーの声がよく揃っている実力が、デジタル録音だととてもよくわかって感心してしまう。

を抱かせずにはおかないが、ギターの音色と技巧的な表現力がこのうえもなく生かされている。ギターという撥弦楽器がまたデジタル録音に最もむいており、デリケートな弱音のたちあがりまできめこまかくとらえられている。出のバックの弦に弱音器がかけられていることにも御注意ありたい。ギターの主旋律がイングリッシュ・ホルンと対話をする部分のバランスとパースペクティヴの音場感がとくにあざやかにとられている。

ロジェー・ワーグナー指揮/ロジェー・ワーグナー合唱団

荘村清志

3「アランフェス協奏曲」は、ギターとオーケストラの作品のなかではとびぬけて有名になったスペインの盲目の作曲家ホアキン・ロドリーゴ（1902 － ）の1940年の作。とくに第２楽章の旋律の美しさは、ジャズ・トランペットの名手マイルス・デーヴィスがほとんど原曲どおりに演奏したこともあるくらい魅力的で、きくものに懐郷の念

4「白鳥」は、サンサーンス（1835－1921）の「動物の謝肉祭」のなかの名小品。原曲もチェロの独奏曲（但し伴奏は２台のピアノ）である。岩崎洸の軽くしなやかなボウイングを比較的近接マイクでとっているので、楽器の胴の鳴りをまじえたチェロの響きもデジタル録音ならではとおもわせる。あまり低音をあげすぎるとチェロの音像が

岩崎 洸

ベルリン・フィルハーモニー八重奏団メンバー

大きくなるから、自然な低音楽器の響きとチェロ独特の倍音の豊かさをうまく再生したい。

5 **「ディヴェルティメント」**は、モーツァルト(1756－91)の数あるディヴェルティメントでも、この第1番の出だしの部分はとても有名だ。コントラバスを加えた弦楽五重奏の編成で、名にし負うベルリン・フィルの弦各パートの主力クラスが見事なアンサンブルをきかせている。五つの弦楽器のパートの明瞭度を保ちながら、アンサンブルとしての響きが見事に融和されている。モーツァルト時代の小編成の曲の多くは王宮など残響の比較的多い場所で演奏されることが多かった。その響きの豊かさをとらえることが音楽的にも重要な条件になる。

6と7はおなじ鍵盤楽器だが、ピアノとオルガンとまったくことなる。

6 **「金の粉」**は、最近若い音楽愛好家に人気のたかいサティ（1866－1925）のかわいたユーモアを高橋アキがひいている。ドライといってよいくらいのピアノの明確な音は、サティの音楽の表現では一ばん大切な要素であることがこの録音のポイントにもなっている。

7のバッハ（1642－1750）のオルガンの小品のなかでも特に有名な**「フーガ ト短調」**は、オルガンが比較的小型（16フィート・パイプ、最低音のC、32.5Hz── 標準ピッチの場合）なので演奏の学究的な折目ただしさとともにこじんまりした感

高橋アキ

ウェルナー・ヤコブ

じは与えるが、低域の基本がたかい純度で美しくとられている。マルクッセンはデンマークの世界的に有名なオルガン・メーカーだが、バロック時代のメカニックな伝統のなかに、現代的なアクション・メカニズムをとりいれていて独特な音色をもっている。

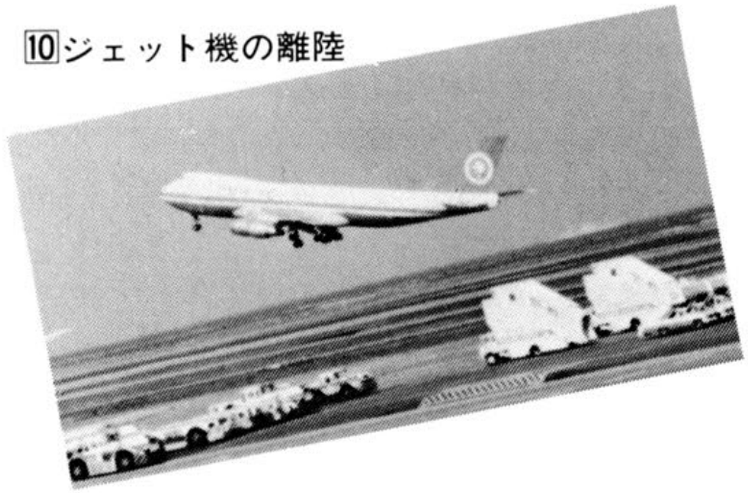
8サラサーテ（1844－1908）の名作としてあまりにも有名な**「ツィゴイネルワイゼン」**をイスラエル生れのイヴリー・ギュトリス(1922 －)が快演している。エネスコ、ティボー、フレッシュに学んだギュトリスは日本でよくよくのヴァイオリン好き以外には知られていないが、名だたる技巧家のひとりとして、ＬＰ時代から欧米でかなりの量を録音している。折目正しい演奏をする今日の若手の名手にくらべると往年のヴィルトゥオーソ・スタイルを今日に伝える数すくないひとりで、コンサートで感興に乗ったときの彼の個性的な演奏は実におもしろい。 駒から指板ちかくまでの弦と多彩なボウイング技巧による彼のヴァイオリンは実にユニークで、ヴィブラートの味つけも妙味がある。この録音ではピアノ用のマイクは立てていないのでギュトリスの主役ぶりと彼の表現力の多彩さが一段とききばえがする。ヴァイオリンのボウイングによる音色の変化を知っているひとにはこたえられない味のある録音。

イヴリー・ギュトリス

9はシュタイン指揮、Ｎ響によるワーグナー（1813－83）である。ここで、今までとまったく異る音の世界、大編成オーケストラのマッシヴな響きが満喫される。**「ワルキューレの騎行」**は、繊細さより、弦と管のコントラストが、そしてフル・オーケストラの迫力が充満する。いままできいたバランスのなかでこのオーケストラが充分に鳴りきったなら、その装置は文句なしということになるはずである。 **（岡 俊雄）**

ホルスト・シュタイン指揮／ＮＨＫ交響楽団

10ジェット機の離陸



11 バット・ノット・フォー・ミー

『スワンダフル』『アワー・ラヴ・イズ・ヒア・トゥ・ステイ』『フォギー・デイ』など数多くの名作を生み出したアイラ(詞)とジョージ(曲)のガーシュウィン兄弟の代表作。1930年のミュージカル『ガール・クレイジー』に主演したジンジャー・ロジャースが歌って以来、多くのアーティストが採り上げている。ナンシーは『あの頃のジャズII』で歌っているが、ここに収められているのは、1982年にグレート・ジャズ・トリオをバックに従えて録音されたスタンダード・アルバム『ホワッツ・ニュー』からピック・アップしたもの。

N.ウィルソン

ナンシーは、珍しくバースから歌いはじめているが、この辺りは流石にベテランと思わせられるところだ。テーマ部は1コーラスを乗りの良い2ビートで歌い、2コーラス目からスイング感に満ちた4ビートのリズムに乗ってドライヴ・フィーリングに溢れた熱っぽいアドリブを聴かせてくれる。ハンク・ジョーンズの堅実なピアノ・プレイ、ジミー・コブの躍動的なドラミング、エディ・ゴメスの芯のしっかりとしたトーンのウッドベースなど聴きどころが凝縮されているという印象を受ける。ピアノは右手のメロディー・ラインがRch、左手のコード・ワークがLchと左右に広げて定位しているので、チャンネル・セパレーションや定位感のチェックができるだろう。また、ナンシーのヴォーカルの微妙な表情の差やエコーなどで解像力の良し悪しを知ることが出来る。

12 ホワッツ・ニュー

ボブ・クロスビー(ビング・クロスビーの弟)&ヒズ・ボブ・キャットのベース奏者であったボブ・ハガートが作曲した有名なスタンダード・ナンバー。昔の恋人と出逢い、今でも貴方を愛していると打ち明ける、という内容の美しいバラードである。過去にはヘレン・メリルの名唱が残っているが、最近ではポップ歌手のリンダ・ロンシュタットが歌い話題となった。

ナンシーはこの名曲を情感豊かに唄いあげ、この曲の持つ切な気な雰囲気を更に感慨深いものにしているといえるだろう。

バックのグレート・ジャズ・トリオは音を吟味し尽くしたかの様に無駄な音を一切使わず、それでいて見事にナンシーを盛り立てている。短いイントロ部を聴いただけでCD化によるクォリティの向上を実感させられる。SN比が格段に高まりピアノ、ベース、ドラムスの各楽器の音像が明瞭に描き出されてくるのだ。H・ジョーンズの美しいタッチのピアノ、E・ゴメスの伸びのあるパワフルなベースなど各アーティストの持ち味が適確に再現され、中央に浮き上がるナンシーのヴォー

カルも鮮度が高くヴィブラートなどディテールの表情までも実在的に再生される。また、ドラマティックに唄い上げるエンディングはナンシーならではといえる。

13 いつか王子様が

1937年にラリー・モレー(詞)、フランク・チャーチル(曲)がディズニー映画『白雪姫』のために作った主題歌でビル・エヴァンス、マイルス・デイヴィス等が採り上げて以来多くのジャズメンが演奏するようになりジャズ・スタンダードとなった愛らしいワルツ。ここでは、アーネスティンが1コーラスを原曲通り3拍子で歌った後に4ビートに変化し、ベテランらしく味わい深い唱法でスインギーに唄いあげている。

ピアノのノーマン・シモンズは60年代初頭からカーメン・マクレエ、アニタ・オデイ、ベティ・カーター等の伴奏者として活躍してきた人だけに心憎いまでにツボを心得たプレイでアーネスティンを巧みにサポートしている。サウンドも全帯域のバランスが整っていてアーネスティンの暖かみのあるヴォーカルをはじめとして各楽器の質感がナチュラルに再現される。G・ムラーツのアコースティック・ベースはピチカート音と胴鳴りのバランスが良く適度に弾力的でスイング感に溢れている。また、T・ホーナーのブラッシュ・ワークもキメが細かく刺激的な響きがつきまとわない。

E.アンダーソン

この曲は再生機器全体のバランス・チェックに最適なソースで、ベースのブーミングが強調されたり逆に薄らぐかで低域特性が判り、そして、ブラッシュ・ワークやシンバルの余韻がナーバスに響くようであれば高域特性に問題があるといえるだろう。

14 ラヴ・ウォークト・イン

これもアイラとジョージのガーシュウィン兄弟の作品で、1937年にユナイテッド・アーティストの映画『ザ・ゴールドウィン・フォーリーズ』のために作られた曲。

C.スローン

キャロル・スローンは、現在白人女性ジャズ・ボーカリストの最高峰といえるが、その実力の程に人気がともなわないという気がしないでもなかった。しかし、1977年に来日して以来、日本で人気が高まりアメリカ本国でも再評価された。また、彼女はDB誌にレコー

ド評を書くこともある才女である。

ここでは、ジョージ・ムラーツのベースのみをバックにスウィンギーで小粋なヴォーカルを聴かせるが、これは彼女の実力の高さを示すなによりの証といえるだろう。

サウンドはいたってナチュラルでムラーツのベースはアコースティック・ベースらしい深みと豊かさが感じられ、かつ、ピチカートのニュアンスも明晰に再現される。キャロルのヴォーカルもヒューマンな温かみがあり、ヴィブラートなどの細かな表情もとてもクリアーだ。

C.コナー

なくては出せない味といえるだろう。

バックのトリオも、デリケートなタッチでクリス・コナーをうまくサポートしている。ノーマン・シモンズのピアノの繊細さ、ジョージ・ムラーツのベースの豊穣とした響きも適確に捉えた好録音といえるだろう。

15 ソリチュード

1920年代にバンドを結成して以来、バンド・リーダー、ピアニストとしてだけでなく作・編曲家として独自の音楽を創造し続けたデューク・エリントンが1934年に作曲した名曲で、作詞は後にアーヴィング・ミルズとエディ・ディ・ランジが行なった。

クリス・コナーは1940年代後半にデビューし、50～80年代にかけて数多くの作品を残している。そして、60年代の半ばからは、ややポピュラーがかっていたが、70年代からは、再びジャズ・シーンに戻り活躍を続けている人だ。彼女は原曲のイメージ通りほとんどメロディーをくずすことなく1コーラスをしっとりと歌いあげている。ここでは小手先のテクニックに頼ることなく淡々と歌っているのだが、充分に感情が籠っており聴きごたえがある。この辺りは、彼女のようなベテランで

16 ドリーム・カム・トゥルー

我が国を代表する若手アーティスト、本多俊之のオリジナル曲で'84年度スイング・ジャーナル誌ジャズディスク大賞の『制作企画賞』を受賞した『ドリーム』に収められている。この曲はチック・コリアとのレコーディングの夢が叶ったことを表現した作品で、躍動感に富んだプレイが聴ける。チック・コリア(p)、ミロスラフ・ビトウス(b)、ロイ・ヘインズ(ds)というトリオは、'60年代後半のコリアの代表作『ナウ・ヒー・シングス、ナウ・ヒー・ソブス』で絶妙なコラボレーションを聴かせたが、本作は、それと同様に緊張感に溢れた演奏が展開されている。本多俊之も三人のベテラン達と互角に渡り合いクリエイティヴなアドリブ・プレイを聴かせ即興演奏家としての高い実力をみせつけている。

サウンドは全体のバランスが整っていて、個々

の音像には、適度なマッスが感じられる。ヘインズのキックドラムには重量感があるが、ビートの切れは良く、音像を曖昧にすることはない。また、アグレッシブなシンバルワークやテンションを送り込むスネアドラムやタム類のパワフルなショットもＣＤ化によってさらにスムーズに立ち上がってくるという印象を受けた。

一音一音に力が籠ったビトウスのベース、繊細かつ鋭敏なタッチのピアノなども聴きどころといえるだろう。そして、もち論、張りのあるトーンで良く唄う本多のアルトも魅力的だ。

17 ラプソディ・デュ・ラ・リュシィ

本多俊之の最新作『サキソフォン・ミュージック』からピック・アップしたオリジナル・ナンバーでソプラノ・サックスを中心としてシンセサイザーを使用し広がりのある音空間を作り出している。どこかエキゾティックな香りのする哀愁を帯たメロディが印象的な曲だ。

シンセサイザーやストリングスの浮遊感や広がりは音場感のチェックに最適だろう。また、シンセサイザー・ドラムの超低音は再生装置全体の低域特性やアンプのドライブ能力を知る手がかりとなるだろう。また、左右に振り分けられたパーカッション類は定位感のチェックに使えるだろう。

アナログ・ディスクと比較すると音場に透明感が加わり奥行感が増すと同時に細かな音の粒立ちも高まっているように思える。

（小林 貢）

＊歌詞は省略いたしました。

左より
ロイ・ヘインズ
ミロスラフ・ビトウス
本多俊之
チック・コリア

オリジナルの解説書では、この頁に歌詞がありますが
PDFでは省略させていただきました。

オリジナルの解説書では、この頁に歌詞がありますが
PDFでは省略させていただきました。

1 ホーム・スウィート・ホーム
ザ・スコラーズ

2 峠のわが家
ロジェー・ワーグナー合唱団

3 アランフェス協奏曲
荘村清志

4 白　鳥
岩崎 洸

5 ディヴェルティメント 第1番
ベルリン・フィルハーモニー八重奏団

6 金の粉
高橋アキ

7 フーガ ト短調
ウェルナー・ヤコブ

8 ツィゴイネルワイゼン
イヴリー・ギュトリス

9 ワルキューレの騎行
ホルスト・シュタイン/NHK交響楽団

10 ジェット機の離陸

11 バット・ノット・フォー・ミー
ナンシー・ウィルソン

12 ホワッツ・ニュー
ナンシー・ウィルソン

13 いつか王子様が
アーネスティン・アンダーソン

14 ラヴ・ウォークト・イン
キャロル・スローン

15 ソリチュード
クリス・コナー

16 ドリーム・カム・トゥルー
本多俊之/チック・コリア

17 ラプソディ・デュ・ラ・リュシィ
本多俊之

DAM